

「新1年生に薦める文献」としての『動物農場』

西川 伸一

私は政治経済学部政治学科に所属している。この学科では、毎年4月に「新1年生に薦める文献一覧」を新入生に配布している。学科の全専任教員が、これから政治学を学ぼうという新入生向けに3冊を選んで、その内容を短評するものだ。私はずっとこの3冊のうち必ず1冊はオーウェルの『動物農場』を取り上げてきた。

たとえば、2017年度には私は次の3冊を紹介している。

ジョージ・オーウェル『動物農場』角川文庫、1995年／岩波文庫、2009年

トランプ政権の誕生で、アメリカではオーウェルの『一九八四年』がベストセラーになった。同じ著者のこの本もぜひ読んでほしい。こちらのほうが短いし、「おとぎ話」というサブタイトルからわかるように、とても読みやすい。政治とはなにか、そのデモニッシュな本質があますところなく描かれている。「動物農場」の憲法である「七戒」が、権力者の都合にいいように次々に骨抜きにされていく。この過程は、とても「おとぎ話」とは思えない。1954年にアニメ化され、ジブリの提供でDVDも発売されている。ただ、結末が原作と異なるので、DVDだけみて済ませないように。

パク・ヨンミ『生きるための選択』辰巳出版、2015年

2017年に公開された映画『太陽の下で—真実の北朝鮮—』をみた人もいるだろう。文字どおり命がけで脱北した著者によれば、「動物農場は北朝鮮そのものであり、そこに描かれているのは私のかつての暮らしだった」(275頁)。著者は13歳で凍てつく鴨緑江を渡って中国に逃れた。北朝鮮では「国家の敵を

激しく憎めと教えられる」(72頁)。これは『一九八四年』に出てくる「2分間憎悪」にほかならない。中国では最悪の辱めを受けながら、ゴビ砂漠をさまよいモンゴルへ。そこから「生還」した韓国でも差別にさらされる。すべては「生きるため」に耐えるしかなかった。

井上ひさし『一週間』新潮文庫、2013年

2010年に亡くなった井上ひさしの遺作。戦前の日本共産党の地下活動やソ連のラーゲリ(強制収容所)に収容された日本人捕虜の様子が「おもしろく」語られ、読み手を飽きさせない。主人公はある「武器」を頼りに、たった一人で大国ソ連に立ち向かう。「失恋は人間を大きく育てる」(344頁)にニヤリとし、「どんな結構な思想も、その国の宗旨になったとたん、指導者たちによって歪められてしまう」(615頁)に深くうなずいてしまう。著者のモットーは「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく」だった。まさにそれがぎっしり詰まった一冊だ。

『動物農場』を知っている新入生は少ない。高校時代に英語のサブリーダーでそのリトルド版を読んでいる学生がいるからだ。確かに、『動物農場』で英語を学ぶのも重要かもしれない。しかし、私は『動物農場』で政治的なものの本質に気づき、政治学への関心を高めてほしいと強く願っている。

私の担当する国家論という授業は3・4年次の配当科目である。その初回には『動物農場』のアニメDVDを決まって観賞する。その感想レポートがその回の課題となる。私は、学生が提出するレポートは読んでコメントを付して、翌週の授業で返却してしまう。なので残念ながら、手元には彼らの感想文はひとつもない。2012年度から続けているので、コピーを取っておけば、この『オーウェル研究』に「学生たちは『動物農場』をどうみたか」と題して書けるくらいの材料になったのだが(2018年度からそうします)。

ではお前はどうかだったのかと問われると、穴があったら入りたくなる。白状しよう。私はオーウェルといえば『一九八四年』の著者程度の知識しかなかった。『動物農場』という著作を知ったのはなんと2008年のことである。ある雑誌にエマ・ラーキン／大石健太郎訳『ミャンマーという国への旅』(晶文社、2005年)の書評を載せることになった。同書に幾度か『動物農場』への言及があり興味をもち、読みはじめた。その様子を当時の日記から再現してみたい。

「08.6.18水。(略)『ミャンマーという国への旅』で紹介されているオーウェル『動物農場』をよみはじめる。おもしろい。」08.6.21土。(略)『動物農場』がおもしろい。まるで国家論だ。(略)帰りの車内でも『動物農場』。イデオロギー操作が面白い。」08.6.28土。(略)オーウェルの動物農場を読み終える。まさに国家論で、授業のテキストに使えないものか。」08.11.30日。(略)洗面所でふと『動物農場』をネタにした政治学入門書を書いてやろうと思いつく。」

日記には書かれていないが、「七戒」が加筆されるたびに心の震えを感じたものだ。こうして拙著『オーウェル『動物農場』の政治学』(ロゴス、2010)の執筆に入っていく。

自己弁護をすれば、40代半ばで読んだからこそ、そのおもしろさに目から鱗が落ちたのかもしれない。私が大学院生の頃に手に取った岩永健吉郎編『政治学研究入門』(東大出版会、1984年)の冒頭には、「政治学は40になって学ばよ」ということばが紹介されている。政治がわかるまでにはそれ相応の人生経験が必要だという意味だろう。それを差し引いても、私は自信を持って『動物農場』を政治学科の新1年生に薦めたい。